

越境者たちの方言誌

——その日本語史への寄与——

一 越境者による方言記録

ここに言う「越境者」とは、さまざまな理由で自己の土地を離れ、異境に生きた人々のことである。今は特に近世期の漂流・布教・転封によってそうした経験をもった者たちを言う。彼らの多くは外的事情によって自己の土地を離れ、他地で直面した事態を自己のことで記録している。そこに図らずも方言が露呈することもあり。本稿では、こうした点に着目し、越境者の事蹟に思いをはせながら、その言語がどのような日本語史の究明に寄与するかを問うてみる。具体的には、日本語方言の文法地図の二・三を例に、その解釈に有用な点を検証する。

また、副題に言う「日本語史」とは、地域方言をふくむ日本語総体の歴史のことである。従来の「国語史」が主として中央語の歴史に偏りがちなのに対し、幾分か各地の方言史も顧慮し、中央語や方言間相互の影響を含むかたちの、総体としての日本語の歴

史の究明をめざすものである。その困難なことは言うまでもないが、理念としての考え方は誰しも認めるところであろう。そして、過去の地域方言の資料は極めて乏しく、偶然にたよることが多いものの、ここに言う越境者の記録は案外それに資することも多いのである。本稿では方言間の関係にまでは言及できないが、これらの資料が幾つかの地域方言史を深めるのに有用な点を述べてみたい。

その資料群については考察中に述べることとし、この有用性をはかるのに、今日的な全国方言の文法についての地図『方言文法全国地図』（以下、GAJ）のうち、意志・推量に関する地図を使用する。まずこれら地図の史的解釈のおよそに触れ、その上で問題の資料群がこれらの言語地図の解釈の深化にどう寄与するかを見ていく。

彦坂佳宣

二 GAJの意志・推量図の概括的解釈

二・一 意志表現の場合

図1はGAJ「起きよう」(見出し)の意志表現の地図である。国立国語研究所「方言研究の部屋」で公開しているデータと地図を基に彦坂が簡略図とした。「起きよう」は一段(旧二段)活用動詞で、五段活用よりも助動詞ヨウが分化する過程などが複雑で検証に有用なためこれを例とする。焦点は、見出し「起きよう」の「よう」相当が各地でどのような形式か、その史的解釈をどう付けられるかの点である。以下、問題となる形式はカタカナで示す。

図1のおよその解釈は彦坂(二〇〇二a)に述べたので、今は概略を示す。

解釈の主導原理はいわゆる方言周囲論であり、中央での言語変化が地方へ波状的に伝播し同心円状の分布となる、これを逆推すると歴史が現れるという考え方である。ただ、地域固有の変化にも注意が必要であり、この原理に外れる場合も多い。

この原理から、図1で最新のものは、かつて中央語があった近畿の「起きヨウ」である。この最初は「起き+ウ」構成であり、国語史ではここから「起きユー」↓「起きヨー」↓「起き・ヨウ」と、今日ヨウが分化している。この歴史を反映して、「起きヨ」は近畿の両脇に広くあり、「起きユー」は離れた中国地方

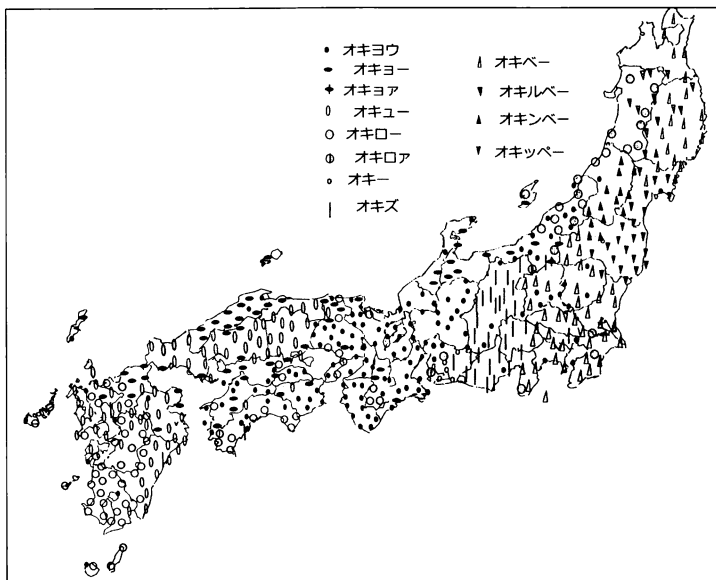


図1 GAJ106 図「起きよう」

山間部や九州に多い。中国地方でも交通の盛んな外周部ではやや新しい「起きヨ」ある。

一方、東日本は別形式によっている。関東はヨウが期待されるが、方言レベルでは古典語「べし」を継承するベーが広く展開し、関東では語幹に直接する「起きベー」、それ以北は終止形接続「起きるベー」、福島県付近は「起きッペ」もあり、地域差がある（今この差に深くは触れない）。愛知県東部・静岡そして長野県地域にはオキズがある。これは、古典語の「むとす」が中古にムズ、中世にンズ・ウズ化したものの末裔である。

その他、日本の外周部には「起きロー」がある。北部日本沿岸に広く、愛知・奈良県・淡路島に散在、そして土佐・九州南部に広い。これらは「起きる」など一・二段活用が、語数が多く優勢なラ行五段活用（「知る」など）に引かれ、意志形「起きロー」となったものである（その機構は、「知る（ラ行五段…起きる（一段）＝知ロー（五段意志形）…起きロー（五段化意志形）」の類推）。この変化は国語史では見られなかったことであり、規範性のとばしい外周地域で発現したとされている。この指摘は、GAJを使用しては小林隆（一九九五）があり、彦坂（二〇〇二b）も考えたことがある。

以上をまとめると、全体としては、関東以北のベー類が最古のもので、平安期前後の「べし」が近畿から東西に伝播し、次に「むとす」が変化しながら広まった。その後、新たな意志・推量「む」が広く展開し、西日本では先行の「べし」「むとす」類を塗

り替え、上述の「起き＋ウ」に発する各段階が伝播の時間差による分布模様を形成した。すなわち、中国山地の「起きユ」は古態をとどめ、その外側は四国も含めて瀬戸内・日本海による交通で、一段階新しい「起きヨ」に代わったと見る。なお、九州の「起きユ」は固有の事象があり後述する。そしてラ行五段化形「起きロー」は各地固別になら行五段動詞に類推して発生した。ただ、この定着時期は地域ごとに違うと思われる、その特定は課題である。以上の模様は、西部日本で比較的新しい形式が分布しやすく、東日本では遅いことも示唆し、日本語の形成史の一面を語る。

なお、五段活用はこれほど複雑でなく、中央地域と西日本には「う」による「書コー」、そしてズ・ベーの類は図1と同じ分布であり、全体に西早東遅の歴史も同じである。

二・二 推量表現の場合

GAJには推量表現「起きよう」がないので、「書くだろう」を参照する。これを図2とし、図2-1には古態形式のウ・ウズ・ローの類、図2-2には比較的新しい、ダローなど「断定辞を先立てウ・ウズ・ベーなどが後接する」型に二分して示す。

特徴は、図2-1の類が周辺にあり、国語史の古い形式を継承し、意志表現と同じ形式によっていることである。その歴史も図1の解釈に準ずる。ただ、図1にはない、古典語「らむ」の変化した「書くロー」が新潟県・四国南部・九州（一部はツド化）な

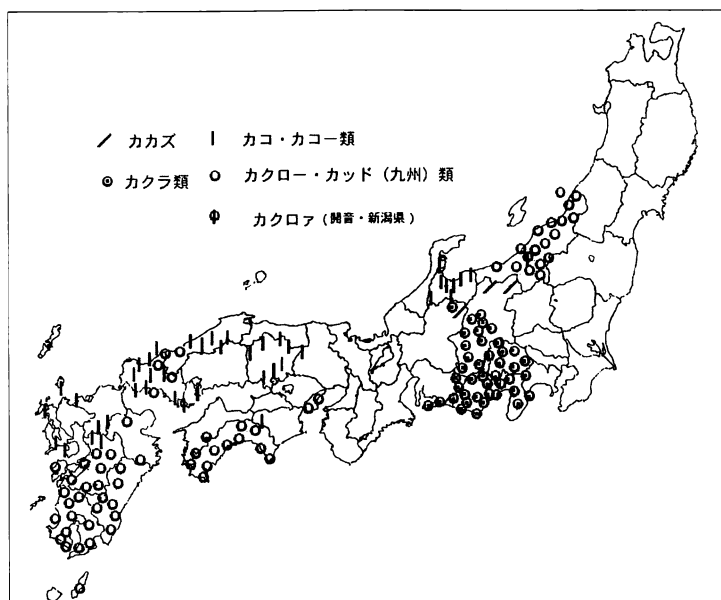


図 2-1 GAJ 112 図「書くだろう」

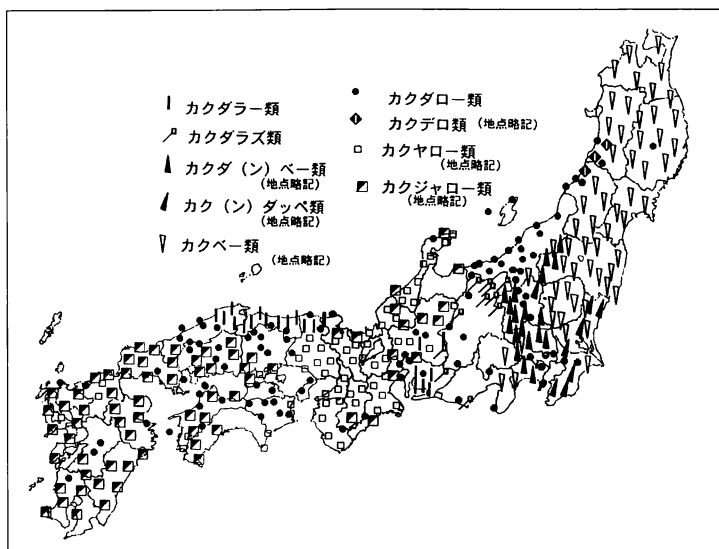


図 2-2 GAJ 112 図「書くだろう」

どにあり、同じものが「書く^ラ」形で長野・山梨・静岡の地域にある。なお、都合で図2―2に入れた「カクペー」もこの仲間である。これらは図2―2の類より概して外辺にあり、「らむ」出自形のロー・ラを除き、意志形式と同形、つまり意志・推量が同じ形式に依った古い時代のものである。

一方、これより新しい図2―2の諸形式は、ダロー・ダ（ン）ペーなど「断定辞＋ウ・ウズ・ペー」一体型の新しい表現法による。この新古の順も図1の諸形式のそれに準ずる。つまり最新は、断定辞にウを後接させた、関東付近のダロー、近畿を主とするとするヤローであり、中国・岐阜付近を主とするジャローは、ヤローの前段形でやや古い（この先後は、断定辞の先後順による）。次に古いものは「むとす」出自のダラズ（これは後にズを落としてダラ（ー）化する）、そしてペーによるダ（ン）ペーが図中の形式のうち最も古いものである。なお、ペー類は、関東に「断定辞＋ペー」型があり、その外辺には動詞に直接する「動詞＋ペー」型があり、後者から中央地域で前者の型となったことが明らかである。

三 「越境者の方言誌」の活用

以上の言語地理学的な解釈を深めるのに、越境者たちの記録はどう有用となろうか。そうした点について、知多・石見・薩摩そして桑名の場合を取り上げる。

三・一 知多漂流民の場合

この漂流と船子「音吉」の動静、またその近代アジア史の位置については、春名徹（一九七九）の詳細な研究がある。それによれば、天保三年（一八三二）、尾張国知多郡小野浦の廻船「宝順丸」は鳥羽から江戸への航海中に難破し、大平洋を越える一四カ月の漂流のち、当時のイギリス（現カナダ）領バンクーバー島付近に漂着した。生きていたのは岩吉（満二八歳）・九吉（同一五）・音吉（乙吉とも、同一四）の三人のみ。現地人に救われ、やがてハドソン汽船会社の船に、さらに別のイギリス船によって一八三五年にロンドンに回航され、続いて同年マカオに落ち着いた。背後には彼らを日本との開国交渉に利用する目的があったという。この点で、彼らは近代アジア史と深く関わる運命を背負うことになるが、今は方言誌の問題に焦点を絞ると、日本人送還を考える手立てとして、ひとまずプロテスタント宣教師で中国語通訳官でもあるギュツラフに彼らを託したことから、日本語として初めての聖書翻訳の業が始まった。

ギュツラフは日本への布教を計画し、この漂流民の力を借りて「約翰（ヨハネ）福音之傳」（一八三七年、天保八）を翻訳した。その完成後、漂流民（知多組三人、九州組四人）を送り届ける名目で、アメリカ、オリファント商会のモリソン号で、通商を開くため江戸に向かったが、幕府はこれを追い返し、彼らは結局日本にもどることは出来なかった。その後、音吉は、香港・上海などで貿易に従事し、時に回航された漂流民たちを助け、また英国船

の通訳として日本に赴き、後年は幕府のヨーロッパ使節団の一員たち、福沢諭吉とも香港で面談している。なお、近年分かったことであるが、これら漂流民の子孫が判明し、関係者が知多を訪れている。

こうした経緯で成った聖書翻訳文に、知多付近の方言模様が隠されている。彦坂（一九八七）により例を挙げると、かつて日本語に広く見られた合拗音は既に無く、語彙では西日本では区別しない「明るい」と「赤い」を区別し、活用では「死ぬ」は古典語のナ変でなく四（五）段化し、サ変は特有の下一段的なセル形、サ行四段動詞連用形はイ音便、理由を表す助詞はニ・デによるなど、今日の知多ないし愛知県地方に見られる特色がよく現れている。

問題の意志・推量表現については、図1、2によれば、今日、意志表現が近畿からカコー・カカーの並びで、知多はこの境い目、愛知県東部付近からはカカズ・オキズとなる。この分布の過去の模様を推測する資料は尾張のものが豊かにあり、地図と似た形式の他に、「むとす」出自のものが現れるが、知多については滑稽本「郷中知多栗毛」（天保14年序、稿本、尾崎久彌旧蔵）があるのみで諸事象の確証に乏しかった。そこにこの翻訳文が加わることになる。性格の違う資料にどう問題の形式が現れようか。

聖書の訳文を岩崎摂子編（一九八四）により、別に翻訳の基になったと思われる『ジェームス欽定聖書』の対応する英文を添えて示すと、次のようである。なお、例文は論証に支障のない範囲

で不自然な区切りや字句を正したところがある。用例末尾の番号は章―節を示す。

- 1 ワシガ ヒトラ カワイガラズ、ヂシンヲ ヒトニアラワサズ (14-21) (I will love him, and will manifest myself to him.)
 - 2 ゴクラクノカミサマアガル、ニンゲンノムスコニ アマクダルノラミズ (「ムスコ」を「ニ」に補正) 1-51 (You shall see heaven open, and the angels of God ascending and descending upon the Son of man.)
 - 3 エズスク アノヒトタチニユフタ ニンゲンノムスコトアゲラレタノラミズトキニ、ヤマエタチヲ (8-28) (When ye have lifted up the Son of man, then shall ye know that-)
 - 4 ミナニン ヒトニソンジル クサラス タシワ井ノチヲアランギリアルユエ 3-15 (That whosoever in him should not perish, but have eternal life.)
 - 5 ミナユリアツマレト。ヨバアテユフタ、ワシドモナニヲツクロカ (11-47) (and said, What do we?)
- 例1は意志「可愛がろう」の意味を「カワイガラズ」と、助動詞ウス出自のズで示している。例2は推量で、同じく「見ズ」とズであり、例3はその連体形、いわゆる婉曲法のである。このズは否定の助動詞と見られやすいが、意志・推量のそれなのである。このように訳文は意志・推量ともウスで表現し、連体形の用法もある。今日のなうは、例4の「有らんかぎり」のンがあるが、稀

に慣用的に使用され、しかし、これは恐らく傍らにあったと推測されるメドハースト『英和・和英語彙』(一八三〇、バタビア刊)に「eternal」ナガシ・アランカギリ」とあるのに従い、同じく例5の「何を作ろうか」のウはこの例だけであり、同辞書の和英部「ツクル to make, to do」によつて訳したものであろう。

本題からそれるが、この辞書と聖書訳文とは強く関連する。右例の範囲だけでも、例2の「アマクタル」は和英部に「アマクタル To descendent from heaven」がある。例4の「タダシ」も英和部に「but タダシ・タゞ」とあるものを利用したと思われる、しかし意味が通らないことから、機械的な当てはめであらう。このような傾向の中で、意志・推量表現の大勢は助動詞「むとす」出自のズによつてゐる。知多方言の露呈が明らかである。

一方、推量では、今日的なダローなど「断定辞+旧意志・推量助動詞」型のは無いかと探せば、硬い文体を基調とするためか、断定はナリが多く、稀にダはあるが、この表現型はない。なお、訳文中に二例あるダは「ヒトニトウ ヲマエワ ダレダ」(二一〇)のように会話文に限られ、これも当時の知多のものであるらう。

これに対し、「郷中知多栗毛」の推量には、「むとす」出自の形式の他に、次のような例が出る。

1. 大の舟(知多大野の舟人)「マア 大かたひよき橋、越いただらあず。えつぽと走らにや追付くまいぞへ」上23丁ウ
2. 供男(三河人)「やんがて、めしよ(飯を)もて来るだら

あず」上85丁ウ

この「だらあず」は、「断定+意志助動詞ウズ」一体型の、標準語で言えばダロー相当の型である。これが聖書訳に出ないのは、上のように硬い文末表現が作用しているのではないか。その点で、知多にも新型の推量、ただし方言的形式のダラ(一)ズがあったと思われる。ただ訳文のようにまだ単独のズによる旧型の意志・推量の兼用形式が根強かつたのであろう。

こうなると、問題の「起きる」の推量形も、やはり「起きズ」であつたことは容易に想定される。すると、図1・2などでズが今日、愛知県東部以東にあるが、近世期には知多を含む尾張以東に盛行し、その後ウに推されて東部に押しやられたことが見えてくる。また、図2のダラー形はこのダラズのズ脱であり、GAJの時点では一段階進んでいることが分かる。

別の問題となるが、断定辞の形式に上記の知多の二資料ではダが現れていることが注意される。一体、中世から近世にかけての断定辞は、近畿地方では「である↓であ↓ぢや↓じゃや」の変化があり、近世はその第三ないし四段階、これに第五段階が現れ始める。関東では「でや」から中世末には「だ」となり、ダが成立しているとされる。これに対し、近世になつても尾張では「でや」の段階であつた。それは、江戸者「東花元成」——これも越境者として名古屋に住み、その観察によつた膝栗毛物の一種「名古屋けん物四編の綴足」(前編・文化二二年)——これは「東海道中膝栗毛」の第四遍が熱田から桑名へ舟で渡り、名古屋を描かなかつ

たのを意識し「綴足」としたものの）の序文に

名古屋言葉の「デヤ」は江戸の「ダ」、上方の「ジャ」といふにひとし

とすることでも分かる。これに対し、知多の右記二資料は、わずかに年代は下るが、ダが現れている。恐らく、口語主体の生活のため尾張より先じた変化があったのであろう。このように、知多漂流民の訳文は地方的な方言模様を知ることのできる資料なのである。

以上によれば、尾張・知多地方の意志・推量形式の変化は、早くは東部日本にある「べし」が伝播し、やがて「むとす」の方言化形がこれを塗り替えて「起き（ー）ズ」などの形式で定着し、さらにズ脱を起し始める中に、近畿から尾張中央部に「う」による表現が迫りつつあった。同時に、推量はウズ・ウによる「断定+ウズ・ウ」型が生じはじめ、その断定部は尾張はなおデヤ、知多ではデヤからダに変化し出していたことが想定される。

さて、一体、彼らの聖書訳は、先のわずかな例文でも分かるように、ほとんど基になったと推定される英文の逐語訳であり、日本語として不自然である。また、キリスト教の概念も理解困難な中で、彼らは船乗りを業とする日常生活語で訳出に臨まなければならなかった。しかもまだ若く、社会的な言語経験も浅いはずである。さらにギュッラフは語学の才があったとされるが、その傍らにはわずかな日本語関連の先述の辞書しかなかったのではない。訳文の意味が通らない点の多いことも無理からぬことであっ

た。しかし、日本語聖書翻訳史における最初のものとして、この訳業は大きな一歩を記すものであり、合わせてアジア近代史の中で日本の開国前夜の一道程に関与するものとなっている。この点は春名のものに詳しい。

三・二 中国地方「石見方言茶話」から

次に中国地方山間部の資料について見る。ここには早く中世から伝承された「田植草紙」が知られている。しかし、その書写は近世も遅くのもので、およそは中世後期の様相が保持されていると思われるが、注意を要する。その語学的研究には山内洋一郎（一九七二）がある。これに対し、近世中頃の成立・書写の「石見方言茶話」は、近年、米谷隆史（二〇〇四）で紹介されたものであり、作成者「仰誓」の時代の方言を彷彿とさせる面があり貴重である。

米谷を参考にとすると、仰誓は享保六年（一七二一）京都生まれ、二三歳で伊賀上野の住持、四四歳で石見国の安芸国との接地域である市木（いちぎ）浄泉寺に来て、安永四年（一七七五）の序文によれば、「寺務たること一〇年」「京華ノ言音ト相違」する方言「四百余言ヲモテ一時ノ法話茶談トナシ」たとする。越境者として外から、日常は信者に接して内側からの観察により作成したものである。

本文は漢字カタカナ交じりで、多量の振り仮名もあり、自立語だけでなく付属語との融合形式にもわたって、発音を正確に記す

意図を感じさせる。方言資料としての信憑性の高さは、例えば、「アイ」連母音が規則的に「ア」となり、語彙は「ノコクソ（大鋸屑）」「ミヤスイ（病が軽い）」「トロヘイ（トラヘー民間行事）」「ゴツサル（下さる）」など、『日本国語大辞典（第二版）』『日本方言大辞典』で中国地方に該当する語句も散見され、理由の助詞ケニ・ケーが多用され、ジャにダを混用させ、敬語では（サ）シヤル類、ナサル類などがあり、今日の中国山間部に通じる形式、またその近世的側面を表す要素が多い。市木は、田植歌の盛んな安芸山間部と接する地域で、似た方言性を持つ面も多いと思われる。その意味で、注意は必要であるが両者の比較は時代的变化を幾分か見通せる可能性がある。

では、問題の意志・推量表現はどうであろうか。まず、「田植草紙」（本文は『新古典大系』による、数字はその歌番号）を簡単にまとめると、意志・推量ともウによる「ゆこふ（行こう）33」「着せふ64」「恋ゆふ84」「じやふ（出ふ）84」「恋しかろふ115」などが盛んであり、推量には別に「来るろう59」「摘むろう16」など、古典語「らむ」出自のローがある。

問題の近世前期頃の「石見方言茶話」は、動詞「起きる」による例はないので、表1に、I動詞の語幹母音別にウが付く場合を挙げ、また、II名詞にヲの付く環境もあわせて示し、そこから推測する。

表1 石見資料の「動詞＋ウ」環境・「名詞＋ヲ」環境の例

I. 語幹末母音（＋ウ）	語例・所在	II. 「名詞＋ヲ」環境の例
〈1〉 イ	—	難儀ウ 1 ウ、テンキ（自慢）ウ 9 ウ
〈2〉 エ	進ジョー（ママ）14 ウ、 ～マショー（ママ）15 ウ、 コゲフ（闕フ、欠ける意）17 オ、寝ヨウ17 オ、アツラ ヨウ（詠）6 オ	コメ（米）ウ 14 ウ
〈3〉 ア	ゴザロ（ママ）15 オ、死 ナフ17 オ	カソ（傘）ウ 16 ウ
〈4〉 オ	コ（来）ウ 15 ウ	—
〈5〉 ウ	—	ヤク（疱疹）ウ 2 ウ

Iの「動詞＋ウ」環境の場合、助動詞ウは未然形承接であるから、〈1〉は上二（二）段、〈2〉は下二（二）段、〈3〉は四段、〈4〉はカ変の活用語例となり、〈5〉の環境は無い。そして今「ママ」としたカタカナ表記からして、〈2〉の「進ジョー」「マシヨー」（原本も「ヨ」は小書きである）はシンジョー・マシヨー、〈3〉「ゴザロ」はゴザロ（ー）のような発音と考えられ、すると「コケフ（闕フ）」はコギョー、〈4〉「コ（来）ウ」はコーのような発音であったと推測され、〈2〉については「寝ヨウ」と、短音節語のみヨウが分化しているが、「アツラヨウ（詠）」はまだヨウが未分化の段階である。では、〈1〉に該当する「起き＋ウ」の例はどうなるかと言うと、格助詞ヲの後接する、II「名詞＋ヲ」環境の模様が参考になる。

IIの〈1〉はナンギュー・テンキュー、〈2〉はコメヨー、〈3〉はカソー、〈5〉はヤクローの発音と思われ、するとII〈1〉が「起き＋ウ」環境に近く、オキユローの発音と考えられる。これは図1の該当地域と一致する。こうして近世中期も図1の模様があつたと推測できる。

なお、この資料には、「達者ナウチハ寺参リメサレチヨウズ12ウ」などの「むとす」相当のウズが慣用句として数例あることも注目され、当時の方言にも幾らかはあつたのであろう。今日でも島根県の一部にあることも符合する。

一方、推量形式も、「起きる」の例はないが、上と同じく「起きユ」であつたと考え、図2—1に準じ、「動詞＋ウ」の型と

考える。

問題は、GAJ図2—2のようなジャロー・ダローが既にあつたかどうかである。類例として、「デキテ有（アラ）フ」（17オ）と辞的なテアル形式、「ジヤル（来る）の意」デアラフケニ（8ウ）「未熟（マンダンエン）デアロー」（17オ）などテアル形式はある。説教談話であることを考えるとこれらは固い表現と思われ、口語ではジャローか、土地柄から場合によつてはダローもあつた可能性もある。しかし、どちらかと言えば、上述の「動詞＋ウ」型の勢力が優勢で、今日的なジャロー・ダローはまだやや劣勢ではなかったか。

さらに、図2—1の、現在、中国地方西端や四国・九州南部に多い「らむ」出自のローもこの資料には見られない（過去推量の「つ＋らむ」出自のツローはある）。しかし、ローは「田植草紙」にかなり現れ、また今は九州にも届いている。すると中国地方にもかつてあり、それが「石見方言茶話」の時代には衰退し、図2—1のように、もう少し西部寄りへと狭まっていたことが想定される。

こうして、資料は乏しいが、先行する「田植草紙」と近世中頃の「石見方言茶話」、またGAJも参照すると、ある程度の変化模様が現れてくる。この地域の変化は、意志表現では、「起きウ」出自が「起きユ」化し、山間部を除いて「起きヨ」段階まで来て、しかし、まだ「起きヨウ」のようにヨウ分化までには至らない過程が想定される。推量には「らむ」出自のローがあり、合

わせてウがこれと何らかの表現区分を保って存立し、やがて「石見方言茶話」の時代にはローが衰退し、意志形と同じウが残り、そしてジャロー・ダローが現れ始める歴史が想定される。さらに以前は「ベシ」も伝播したが後発形式に塗り替えられ、「むとす」も伝播し今は痕跡をとどめるといった変化もあったであろう。

三・三 薩摩地方「ゴンザの記録類」その他

三・三・一 九州地方の問題

次にゴンザ資料を見るが、その前に関連研究に触れ、問題を絞っておく。この地方の意志表現は図1で助動詞ウによる「起きユー」と、これがラ行五段化した「起きロー」（南部では「起きッド」化）の二形式が注目され、推量は図2―1から「らむ」出自の「起きロー」（まれに「起きッド」が多く、新しくは図2―2から「起きるジャロー」が強まりつつある。この模様は、既に『九州方言の総合的研究改訂版』『講座方言学9』などに述べられている。一・二段活用類のラ行五段化は小林隆（一九九五）や彦坂（二〇〇二b）のあることも触れた。活用型の類別の視点からは大西拓一郎（一九九五）がある。

一方、迫野虔徳（一九九八）は九州の活用型の変化には固有の傾向があるとし、変格活用を別にすれば五段活用と下二段活用へ統合する「駆流」があること（上二段も下二段化する地域あり）、従来言われるラ行五段化は全国ひとしなみの経緯ではなく九州では問題の一段・二段活用類が、一段化の方向よりも直接に

ラ行五段化に向かう傾向が強いと述べている。

以上から、（1）「ゴンザの資料」で「起きる」の意志・推量形と関連して、ラ行五段化の状況、またそれが盛んになる時期はいつか、（2）一段化と二段活用の保持との関連はどうか、などが問題となる。（1）は上の彦坂でおよそ述べたので、ここでは当面の意志・推量図の解釈の課題を外れない範囲で、（2）ともからめて考える。

三・三・二 ゴンザの資料から

ゴンザは近世中期の薩摩の漂流民、ロシアで日本語を教えた人物であり、短期間の内に膨大なロシア語と日本語の対訳的な仕事を残している。日本へ帰ることは出来なかった。

いま上村忠昌（二〇〇二）第一章によれば、日本暦・享保一三年（一七二八）見習い水夫ゴンザー〇歳の時、一月一日薩摩から大阪への船が難破し、カムチャツカを経てロシア・ユリウス暦一七二九年六月、一行一七名はカムチャツカ半島に漂着、多くはコサツクの隊長らに殺され、ゴンザと三五歳の商人で案内役のソウザと二人だけ生き残り、上級役人に引き取られ、一七三一年ヤクーツクに送られていた。これを聞いたロシア高官が、彼らの日本語の知識を活用すべく提案し、一七三三年、ペテルブルグへ送られた。当時ロシアは極東進出のための手段として日本語が必要とされ、その教師となったのである。一七三六年、科学アカデミーに移された二人は一緒に生活し日本語の保持に努め、ボクダーノフの扶養と指導のもとにキリスト教やロシア語の習得に勢出

し、ゴンザはその才を認められて一七三六年、日本語学校開設により日本語教師となった。上村はこの点につき「(科学アカデミーの学習に)ゴンザは水を得た魚のように、才能を発揮していったものと思われる。また、ロシア語の語彙・文法・音韻の語学を学びながら、ソウザのおかげで日本語力のびていったであろう。そして、自分の使っている日本語に対して、その文法的特徴やアクセントなどに細かな注意を払うことをボダーノフから教えられたわけである。もし故郷の薩摩を出て居なければ、生涯気づかなかった事柄であつたらう」(八頁)としている。そして、ボクダーノフの指導、また共同して、わずか三年半の間に六種類の著作が成された。草案本と浄書本で一〇冊、合わせると二一六二ページにも及ぶとする(一二頁)。しかし、ソウザは一七三六年九月に四三歳で死去、ゴンザも一七三七年二月に二二歳の若さで死去した。なお、ゴンザの薩摩での出身地については確定されていない。

ゴンザ著作の日本での報告と研究は村山七郎にはじまり、「漂流民の言語」(一九六五)に結実しているが、上村はこの補遺をし正確を期した上で研究を深めている。ゴンザの関与した著作の一部はマイクロフィルムの複写版として鹿児島県立図書館に里帰りしている。その一部「図説感覚世界」「友好会話手帳」の翻訳・翻字は江口泰生(一九九八)がある。

これらゴンザの資料を、村山・上村らのロシア語からローマ字転写と日本語翻訳によって見ることにする。注意すべきは、先の

著作は主にボクダーノフのロシア語文をゴンザが日本語に翻訳する形でなされ、ゴザン側ではロシア語の語順にそつた逐語訳的なものであり、かつ日本語を忘れかけている面も危惧されること、本稿の資料としての面では日本語転写に際して漏れる情報もあるかもしれないことであるが、当面の目的にはさしたる支障はないと考える。

ゴンザ関連の資料は上述のように研究が進んでおり、特有の音変化、これに伴う語末を中心とする母音の無声化が盛んであり、敬語助動詞「(ら)るる」もその影響下にル脱を起こしかけて四段化的傾向が見られ、助詞では理由のニ・デ、順体助詞トなど、今日の鹿児島方言に通うか、その前段の模様が様々に認められている。

さても問題のGAJ図1「起きよう」であるが、直接この動詞の環境は無い。そこで、いま大量の語彙が収録されている『新スラヴ日本語辞典』(原本は一七三八年、ここでは村山らによるアルファベット翻字・翻訳、ナウカ書店一八八五)で見る。いま便宜その索引により、整理し表2とした。

まず、1意志・推量の助動詞ウが後接する意志形式を、前項動詞の未然形の末尾母音ごとに整理する。次にまた、Ⅱ似た環境のある形容詞ウ音便について形容詞語末母音ごとの整理を記す。さらにⅢ参考になる名詞形についても整理した。一通り気づいたもの代表例である(用例末の番号は『新スラヴ日本語辞典』の索引頁)。

表2 ギンザ資料の「動詞+ウ」・「形容詞+ウ」・「名詞形」の環境

語幹末母音	I. 動詞+ウ	II. 形容詞+ウ	III. 名詞形
(1) イ	—	キユナス (黄うなす 黄くなす) 476	
(2) エ	ヤキユ (自分を腹立たせる、 やけよう) 561、クツシュ (マ マ) (きつうしよう 自制す る) 482、ウツシュ (ママ) (う っせよう 捨てられる) 462	—	キユ (今日) 478
(3) ア	ニゴラカソ (濁らかそう) 477、 モヤソ (燃やそう) 599、ヤロチユ (やろうと言 う 約束する) 562、オニナ ソ (王になそう) 464	カロナス (辛ウナ ス) 474、キタノス ル (汚なうする) 477	
(4) オ	—	ツユナル (我が強う なる 自分が強くな る) 568	キニユ (昨日) 477
(5) ウ	—	—	

表2の例は十分でないが、(2) Iのエウ環境と(4)のIIのオウ環境はウ(ー)、これに対し(3) IとIIのアウ環境はオ(ー)となり、今日でもいわゆる中世末の才段長音の開合が九州では開音オー、合音ウーで対立している模様がよく現れている。この点は、早くロドリゲス『日本大文典』(一〇六四年刊、いま土井忠生訳、三省堂による)第二巻「卑語」部に記述があり、それが今日にうけつがれているのである。では、問題の「起き+ウ」環境はとなると、合音の「起きユー」となることは明白である。なお、II形容詞の(ー)「キユナス」は「(ー)イ」に入れるべきか迷うが、開合面からしても「起きる」の意志形はオキユーと確定されよう。

次に推量形式は、これを容易に見出せないでいる。参考までにやや時期の下る「友好会話手帳」で、ことわざ「金を纏っても猿は常に猿、片輪者は常に片輪者」の日本語訳には推量形式があり、「・・・サルヂェ オロ・・・キン キチェ オロ」とウが使用された「居口(ー)」であり他の類例でも同じく「う」により、図2-1の「らむ」出自のロー形式は現れない。また、意志・否定形式のラ行五段化形式もまず無い(ただし、全体の前半部分までの調査)。

では、ギンザの時代にこれが無かったかと言えば、ロドリゲスの『日本大文典』に肥前・肥後・筑後、その近辺の国々に問題の形式が使用される記事(第二巻・卑語)が知られ、今日でも図2-12に広い分布がみえるため、ギンザの時代に無かったとは考え

られない。ゴンザの場合、訳出の元になったロシア語文に推量形式の場面が乏しかったためではないか。

以上によれば、ゴンザは「う」によって意志・推量を表しているが、この「う」が後接した場合、今日ではこれがラ行五段化し「やけろー」「失っセロー」となっているが、当時はまだ起こっていない状態である。また、連用形の五段化形なら「起きッて」などと促音化するはずであるが、実例によればそうはならず「煮タ528」「乾(ひ)タ340」などと、促音化していない。参考までに否定形も「ミン(見ん)536」と五段化しない。ただし、わずかに「日本語会話入門」では古典語と同じ「見ん212」もあるが、ラ行五段化した「寝ラン178」がある(用例末の数字は上村著の語例番号)。以上の限りでは、ゴンザ資料でのラ行五段化例は今のところ「寝ラン」のみである。この五段化例の要因としては単音節語ということが考えられるが、同じく「見ラン」などは五段化せず、これだけの説明では不十分である。しかし、例が少ないのはラ行五段化がまだ発達しなかった時期と考えられる。

一方、いわゆる二段活用的一段化例は、上二段活用は一部の語にあるが、下二段に関しては無い。

九州での五段化傾向

一体、九州でのラ行五段化、またいわゆる二段活用的一段化の傾向はどのようであったろうか。改めて先行研究の記述や資料からさぐってみる。いま、吉町義雄『北狄和語考』(以下、「吉町1」)、同『九州のコトハ』(以下、「吉町2」)、篠崎久躬『長崎方

言の歴史的研究』(以下、「篠崎」)なども参照して、これら各文献から意志形式を取りだして整理すると次のようである。出典の略記のないものは彦坂による。

・「柳川方言水+恒河沙一撮」(以下「柳川方言」) 近世中期と推定

「見う」「し(為)う」「しか(仕掛)きう」

*一段化例…アケテ水ライレル事(下二段から、注記の中に)

・「日本風俗考」一八三三 長崎出島「見ユー」「為(シ)ユー」

*「命令形は「食ベロ」などー口末尾形多し」(吉町1)

・「マクドナルドの記録」一八四九 長崎「起きロー」「来

(キ)ロー・来(ク)ロー」

*一段化例は「逃げる」(吉町1)

・「長崎万才」一八五一「どうしふろ」「しふ」は「サ変+ウ」「ろふ」は「らむ」出自の推量

*「当時の文献にはラ行五段化傾向が見えない」とする。九八頁(篠崎)

・「露都創刊口日小辞典」一八六〇 長崎停泊中の記録

*上二段3例/上二段化9例 下二段34例/下一段化61例(吉町1)

・「大和口上言葉集」幕末頃「申上ケウ25才」「しよ(為)こ

とハ36オ」「呉りふ30ウ」「死にをしゆ（為）よりは28オ」／

* 「見ようなら27オ」

* 「見らふ37オ」「ねらふ（寝）37オ」

これらによればやや早い例としてマクドナルドの場合がある。彼は日本への興味から密航し、しばらく長崎で通事に英語を教えた最初の英語教師とされる人物である（伝記はマクドナルド『日本回想記』に詳しい）。これらの資料は取得場面・地域も違い、ひとしなみには捕らえにくいのが、幕末期まではきわめて散発的にしかラ行五段化が見られないとして良いと思う。幕末期に入ってもなおラ行五段化形式は少なく、「大和口上言葉集」になってようやく*印の「見よう」とヨウ分化や「見らふ」「寝らふ」のラ行五段化がやや目立つようになる。この資料の性格はもうひとつ判然としないが、全体としてはラ行五段化がようやく起こり始めた様子が窺えよう。しかし、まだ単音節語の範囲内であることは、この進行が広く行き渡っていないことを示唆するように思う。

一方、上二段語類の一段化はいくらから見られる。下二段の一段化もみえる。実はこれらもラ行五段化とも考えられるが、他の活用形も同時に五段化しているとは思えない中では、一段活用が早かたの動きであったのではないか。全体には、上二段活用が早くに一段化傾向であり、その後他の活用形のラ行五段化がおこり、全体としての五段化が整っていくと考える。上引・迫野の言うように九州での五段と下二段への整備動向は他地域と違う注意すべき点であろうが、二段活用的一段化はこの趨勢に先んじてあ

り、やがてラ行五段化が多くの活用形で揃って行く過程を考えた。この点の論証は、十分ではないが彦坂（二〇〇一）でも述べたところである。

明治期以降は、吉町（一九七六）所収の『鹿児島方言文学四書抄』に、否定「見ラン340頁」「出らん361頁——これは大正三年、命令形「見れ331頁」などど出るが、意志とおもわれる「恪氣しゆ如たッ339頁」と伝統的な形式もあり、盛んとも言いにくい。『口語法調査報告書』（明治三九年）の第五条、上二段の命令、未来」をみても「射ろ・見ろ」「着う・似う・見う」とだけあり、ラ行五段化は無い。公式的な回答とも考えられるが、GAJに見られる広い活用形に及ぶラ行五段化はやや先のように思われる。

以上、九州での五段と下二段趨勢の中では、上二段の一段化が早く、遅れてラ行五段化の諸活用形が現れ、やはり一段化趨勢も過渡期にはあったと考えること、各活用形が揃う形でラ行五段化を強めるのは早くて幕末以降、やはり明治期にかけてのことと考える点を述べた。ゴンザ資料はこの動向のごく初期的な模様を現すことが貴重である。

こうして、ゴンザ、その他の諸資料から推量・意志の変化経緯が推測できる。意志・推量ともウによる「起きユー」が安定し、推量の「らむ」出自の「起きロー」もあり「起きッド」形も派生している。推量では両者が何らかの表現区分があったものと想像される。明治期近くになると「起きユー」はラ行五段化をやや進め「起きロー」（起きロッ）も生じたか）となり、推量のそれと

同形となり、今日、方言として強く存続しているのではないか。また、詳細は省くが「起きヨウ」などヨウ分化の方向を進めなかったのは、上述した九州特有の才段長音の開合の制約が、強くこの方向に向かうことを規制したためと考える。その後、「起きるジャロー」の「断定辞＋ウ」型が進出し、今日のGAJ図2の模様となったと考える。これらの前に「べし」「うず」の伝播がここまで届いたかどうかは不明である。

九州全域の歴史も、ほぼ右の諸形式の変化順で説明が可能であると思われる、地域差はこの変化順の到達段階の各様を示すものであろう。以上に見てきた薩摩地域を主とする様相は、特殊な変異形は別にして、こうした変化経緯が縮図のように現れているように思う。

三・四 桑名藩士による「桑名日記」

最後に、「桑名日記」によって、これまでとは違う方言誌の面を見る。文政六年（一八二三）、越中守松平家主君の転封にともない、伊勢国桑名に東北白河に八二年間いた家中の人々が移住して来た。米蔵番役、渡邊平太夫（当時、数え四〇歳）一家もこれに属する。その一六年後、養子・勝之助（転封時二二歳）一家が支領・越後国柏崎に赴任するに伴い、平太夫と勝之助の書状のやりとりが始まり、およそ一〇年間に続いている。後日、これらは勝之助の次男・真吾の手で、平太夫からの書状は「桑名日記」、勝之助のそれは「柏崎日記」として綴じられ、幾人かの手をへて

桑名郡伊東家の所蔵となり、今日では桑名博物館に収められている。この日記の研究は彦坂（二〇〇三）、また山本志帆子（二〇一〇）などがある。いま澤下春男・能親父子の翻刻『桑名日記』により、これを見る。例文の所在は「巻一頁」で示す。

「桑名日記」は、公事の記述は漢字による記録体風であるが、勝之助が置いていった長男「鎌之助」の愛育記に桑名の動静をまじえた日常の記事は平仮名が勝り、口頭語が豊富で、下級武士の生活や言語を知る格好の資料である。渡邊家では書状が届く度に「みんな二状をよんできかせる。ミな／＼たつしやのよしあんしんいたす」（第1巻—45頁）、などとなり、親族や近所の者達がこの書状を食い入るように読んだ。関係者の動向を知らせる便りなのである。

さて、問題の意志・推量表現については、例えば次のような表現が普通のことである。

1. おば、「そんならつれていつて見せよう」と馬道なかほどまでゆくと、竹のあるを見て（鎌之助）「此あいだおじさと竹買いニきたとこだぜ」^一
2. 直ニ半分おろし大根ヲかけ、（鎌之助）「昼飯給ようたべよう」と言て二切給て「うまくてこたへられん」と言。^二
3. 「けふも雨降なら、御断を申て上ようと思ふて居た」と、（親戚の）おば、さまの御咄しのよし。^三
4. 鎌「おろくハなぜこんだらうねへ、いつくるだらうねへ」。おば、「おとつさとおつかさハとふじや、おか、の

ち、をのんだらよかるふが」 鎌「おか、のち、よりおば、
のがいつちゑ、」 一〇〇

5. (おはば)「大方半分ハ絞兵エニ貰ふたのだろう」と云バ、
(鎌)「馬鹿云なへ、皆んなおれか釣たのた、うそなら熊の護
王でも何でも吞」と云たけな。 一〇一

例3までは意志の例で、「おはば(平太夫の妻)」「鎌(之助)」と
もにすでにウからヨウを分化している。ここは図1の今日の桑名
と同じである。しかし、例4・5の推量になると両者ともダロー
を使い、形容詞は「よかるふ」とウが直接に付いている。図2
2で桑名はジャロー／ヤローの地域であり、大きく食い違う。こ
れは転封前の白河での言葉が継承されているからであり、意志の
ヨウもこうした性格のものと考ええる。

桑名地方の方言模様は近世後期でも図1・2と同じと思われる
が、白河時代を長く過ごした家中関係者らが異質な言語をここに
持ち込み、いわゆる言語の島を形成していたのである。似た例
は、近世期の山形・秋田・延岡その他の地域にあったことが知ら
れている(例えば『口語法調査報告書』の記載)。しかし、その
実態を伝える資料は稀であり、そこにこの「桑名日記」の価値の
一つがある。すなわち桑名地域の言語の位相面を語る資料なので
ある。また、右の諸例をみても、何と活き活きとした口頭語の記
録であろうか。

さて、その家中弁は、しかし白河の地は上掲の図類によれば、
べー主体の方言が行われ、近世でも同じはずであるが、こことも

異質である。この日記にべーは全く現れない。すると平太夫らの
家中弁は、白河においても特有の武士言葉を保持し、庶民の方言
とは異なる位相にあったことが分かる。越中守松平家は、かつて
桑名を治め、越後に移り、そして白河に移り、再び桑名に戻つ
た。その間に家中弁が次第に形成されて行つたものと思われ、白
河の地のみでこれらの性格が獲得されたわけではないと思われ
る。一方では、転封を経るまでもなく、近世期の身分社会ではこ
うした階層によることばの位相が顕著にあったことが想定され
る。

桑名藩は明治を迎えて解体し、武士団の一部は近傍の員弁(い
なべ)の開墾・定住の道を選んだという。昭和期にこれらの子孫
の言語調査をした記録によれば、いわゆるズーズー弁的な発音を
保ち、否定の助動詞はナイ、ハ行四(五)段活用も「言ッて」な
ど促音便と、なお白河在住以来の性格をもち、東部方言的な要素
が顕著であると報告されている(「三重県方言」三、一九五七
年)。桑名藩の書物をうけつぐ秋山文庫(桑名市図書館)には、
漢籍の講義録やそれを記録した子弟の帳面があり、何と大正期の
添削帳にも師による修正の書き込みとこれらの要素が顕著なもの
まである(彦坂二〇〇三)。武家の子孫の矜恃として、先祖から
の言語がながく保たれていたのであろう。

四 越境者による方言誌の特性

越境者の記録は、他にも、漂流による東北人などの、旅日記、よく知られた伊勢の大黒屋光太夫のものなどがある。しかし、今回の言語地図の解釈に関連する事項は見出せず、西日本の場合に限られた。このように目的によつては外れるものもあるが、図らずも異郷に生きた生の声や記録から言語史の記述に有用な点があることは想像に難くない。しかも、その多くは地方人による地方のことばの記録であることが方言史研究に有益である。

その際、各人の置かれた境遇によつて評価視点が異なり、例えば知多漂流民の場合は教育程度やギョツラフ主導の多寡、翻訳の参考となる諸環境などが問題となり、「石見方言茶話」では、上方出身の教養人と地域人への説教という兼ね合いがどうであったか、ゴンザでは成人まぎわの日本語力、日本語を共にする者がソウザのみ、しかも学習によるロシア語への馴化の状況が介在し、「桑名日記」でも下級武士としての性格―可愛い孫に時に武士の矜持を求め、連れて行く銭湯では近隣庶民と盛んに交流するなど―がどう反映するかの問題がある。どの言語資料も同じながら、以上の類はとりわけその成立や事蹟の背後にある事情についての理解が必要となる。冒頭で、越境者の事蹟に思いをはせながらとした点はなお深める必要がある。

引用・参考文献

- 岩崎棋子編（一九八四）『善徳纂 約翰福音之傳 本文ならびに総索引』桜楓社
- 大西拓一郎（一九九五）『日本語方言活用の通時的研究序説』平成六年度科学研究費・奨励研究（A）報告書
- 上村忠昌（二〇〇二）『漂流青年ゴンザの著作に関する総合的研究（第二版）』自家版
- 小林隆（一九九五）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』四五、のち『言語学的日本語史の方法』（二〇〇四、ひつじ書房）に所収
- 迫野虔徳（一九九八）「九州方言の動詞の活用」語文研究八五、のち『方言史と日本語史』清文堂、二〇二二所収
- 篠崎久躬（一九九七）「長崎方言の歴史的研究」長崎文献社春名徹（一九七九）『につぼん音吉漂流記』晶文社
- 彦坂佳宣（一九八七）「書記邦訳聖書『約翰福音之伝』（ギョツラフ）の方言性」立命館文学五〇〇
- 彦坂佳宣（二〇〇二）「九州における活用型統合の模様とその経緯」日本語科学九（国立国語研究所）
- 彦坂佳宣（二〇〇二a）「日本語方言における意志・推量表現の交渉と分化」『国語論究』九、明治書院
- 彦坂佳宣（二〇〇二b）「地方語史の開拓と方言地理学―一段活用類意志形の五段化をめぐる―」『方言地理学の課題』明治書院

彦坂佳宣（二〇〇三）「桑名藩家中弁の成立と終焉」国語学
五四—三

村山七郎（一九六五）『漂流民の言語』吉川弘文館

山内洋一郎（一九七二）「田植草紙のことば」田唄研究会編
『田植草紙の研究』三弥井書店、のち『中世語論考』清文
堂、一九八九所収

山本志帆子（二〇一〇）『『桑名日記』にみる近世末期下級武
士の命令表現』社会言語科学会、一三—〇一

吉町義雄（一九七六）『九州のコトハ』双文社

吉町義雄（一九七七）『北狄和語考』笠間書院

米谷隆史（二〇〇四）『（石見）方言茶話』と『肥後方言茶
談』をめぐって』第二一九回近代語研究会発表資料

（付記）この論は、二〇一二年度、立命館大学日本文学会で
の講演内容を論文風に文字化したものである。そのため論証
の不十分な点がある。事情を勘案してとされたい。

（ひこ）さか・よしのぶ 立命館大学特任教授